

哀れな男が行く、マジ恋世界~なんで、ヤンデレばかりなんですか  
ねえ(震え声)~

KEY (ドM)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

こんにちはんこそば。

KEY (ドM) と申します。

マジ恋が面白かったので

いつもの病気(とりあえず1話投稿すること)を発症。

くあらすじく

輪廻転生って本当にあるのか思っていたけど。

こうしてぴちぴちの若者になった今、信じざるを得なくなった。

あの孤独死しやがったアホがいなくなってから、

ぽっかりと胸に穴が開いたような気分だったけど。

まあ、いい。

それよりも、神様。

俺はもうスローライフ満喫して、時々風●いくくらいの生活がいいんだ。

なるべく、平和で、生きやすい世界に……。

……おい、なんで素手でコンクリぶち割る人間がウジャウジャいるんだ？

なんで俺に熱視線を浴びせてくるんだ？

おい!? 待てよ!!? なんで女どもが追いかけてくるんだ!!!

や、やめろおおおおおとおおお!!!

とある護身術がちよつと使える男が、

マジ恋(ぶちドラゴンボー●)の世界の主人公に憑依しちゃって、



## 目次

ようこそ、マジ恋世界に〜風●通いのスローライフ目指そうとしていたら、なんかいろんな人間から狙われている件について（）〜

1

あいつら絶対ドラゴンボールの世界の住人だって。絶対（震え声）〜

俺は悪くねえ!!〜

8

決闘に向けて〜どれだけ鍛えても、怪物どもには勝てる気がしない

（本音）〜

14

ようこそ、マジ恋世界に〜風●通いのスローライフ目  
指そうとしていたら、なんかいろんな人間から狙われ  
ている件について( )

に、  
おはようございます、なんて体育会系のノリで言われたあいさつ

ぼんやりとしていた意識がハッキリとしてくる。  
閉じていた目を開き、前を見据える。

「——なんか、白いもやがふよふよと浮かんでいた。」

「——あ、起きた？」

「……………」  
夢か。」

ありえないであろう現象。つまりそれは夢ということである。  
なので、意識を覚醒させるために寝なければ。

再度目を閉じて、ふうふう、と息を吐き、横に寝っ転がる。

——やだ、この子リアリストすぎ……？  
ぶつぶつと独り言がうるさいことこの上ないが、

関わりたくない。両手で耳をふさぎ、寝返りを反対側にうつ。  
そのうち諦めるだろう。

しかし、もやは俺の理解をはるかに超える行動をとった。

——起きろ

「!?ぐあああつ!!?」

——なんか、白いもやにタツクルされて20mほど吹き飛  
ばされた件について

それが、俺の”神様”との初めてのワーストにして、ファーストな  
コンタクトだった。



「——はっ!?!」

がばりと身を起こし、荒くなっている息を肩で呼吸し、整える。首元を右手で触ると、ぬめりとした汗が手についた。背中にもびっしりと浮き出ているのを感じる。

夢。そう、夢だ。

しかし、思い出すだけでも忌々しい夢だ。

そうだ、あの時もつと条件を絞っていれば——

「——やまと?」

「……あ、悪い。」

ぐそぐそ、と横で一緒に寝ていた幼馴染、

川神一子がこしこし、と目を右手でこすりながら、

ベッドから起き上がる。

「起こしちまったか?ぐめんな。」

「ううん。——やまとと一緒にのタイミングで起きて、

うれしい。」

「お、おう。」

につこりと笑顔でそういつてくる彼女から内心、

距離をとりつつも、冴えてしまった頭を休ませるため、

ベッドから降りて、スリッパを履く。

「どこに行くの?」

「お前の好きなホットミルク淹れてくる。ちょっと待って——」

「私も行く。」

「え?いや、俺一人で」

「やだ。行く。」

「……」

俺が教えた足技を使って、胴体にぎゅうううとしがみついてくる一子にいつものことだため息をつき、両手を一子の肩の下にいれて正面から抱っこする。

「お前な……。いい加減子供じゃないんだからそろそろ俺離れしてもいいんじゃないか？」

「ヤ。」

一文字で拒否されるとは思わなんだ。

とりあえず、もちっぱも辛いのでさっさと台所に行つて、牛乳を取り出して二つのコップに注ぐ。

「砂糖、いるんだろ？一つでいいか？」

「二つのシュガー(袋に入っているタイプ)を二人で分ければちょうどいいよ。」

「ま、夜中だし、抑えておくか。」

近くにあったスティックタイプのシュガーを開けて、コップに半分ずつ入れていく。

電子レンジを右手で開けて、中に俺と一子の分のミルクを入れてあたたためボタンをぴつと押すと、レンジがウイイイインと音を立てて動き始める。

あと、”3分”と表示が出ていた。

一子を両手で抱きかかえたまま、椅子に座りつつ、彼女の顔を見る。

じーっとニコニコと笑いながらこちらを凝視してきている。

「……。あの、一子？」

「なあに？ヤマト。」

「……。それ、楽しいか？」

「うん!!とつても!!」

前世の俺が今の俺を見たらきつと、ケータイ電話を取り出してこういうだろう。

”お巡りさん、ロリコンです”、と。

◆  
川神学園。

神奈●県、川神市に位置する高校。

一見すると普通の高校のように見えるがその中身は全く違う。その変わった教育理念から独自の授業、教育を実施しており、

中でも特徴的なのは武術を奨励している点である。つまり、決闘などもルールの範囲内であれば認められており、腕に自信のあるものが何かと多い。

で、俺は学園に通う一生徒でしかないのだが……。

「ふあーあ。……ねみ。」

「むんっ!!むんっ!!……うーん。」

このポーキングのほうが筋肉映えするか?むんっ!!」

「ねえ、ガクト。登校中にボディビルダーの練習するの、やめよう……。

一緒に歩くの恥ずかしいよ……。」

「ねえ、ヤマト!!今日の放課後はどうする!?!」

「……ヤマト。今日、お弁当作ってきたの。」

「……。」

これである。

俺の幼馴染である通称、”風間ファミリー”は10年以上の付き合いのある相手だ。

その誰もが家族同様の存在であり、切って切れぬ腐れ縁である。上からあくびをしているのがキャプテンの風間翔一ことキャップ。ボディビルドの練習をしているのがガクト。

それを止めている、中性的な少年が師岡 卓也こと、モロ。

元気いっぱいなワンコ系美少女、川神一子。

もじもじとしながら、弁当を差し出してくる美少女、椎名 京。

そして、俺こと尚江大和の全員、風間ファミリーだ。

あと何人か、メンバーはいるのだが、

通常、登校する際はこのメンツである。

ぶっちゃけ問題児ばかりだと思うが、悪いやつらではない。

ただ、人目を引くようなことをついしてしまうやんちゃなやつらだ。

そのおかげで、俺も大変な目にあつたが(恨み節)



怒ってないぞ？（真顔）

全然（拳を握りしめながら）  
で、男子連中はまだいい。

なんだかんだ言つて、学校では奇行に走ることもないし、  
ちゃんと授業も受けてはいる。

成績はそんなよろしくないが、赤点を取らないように努力している  
ところは、

好ましい。

問題は……。

「……………」

「……………」

「

——いつの間にか、俺の両隣をキープして、  
にらみ合っている美少女二人である。

一子に、京。

100人中100人が美少女だと答える二人が、  
目が笑っていない笑顔を携えて、俺を挟んだまま、  
見つめ合っている。

ETごっこかな？（○）

あ、そうだ（名案）

生贄にできる男子が3人ほどいるじゃないか。

「さーて。先に学校行ってるわ。」

「むんっ！むんっ！……プロテインの量、増やすか……。」

「あ、二人とも。……ごめんね、ヤマト？」

危機を感じ取ったのか、男子3人は俺たちから離れるように、  
小走りで先に行ってしまった。

つまり……………」

「……………」

「……………」

「

二人に両腕を組まされながら、  
ゆっくりと、ゆっくりと一歩一歩進みつつ、連行されていく。  
あたりにいたスズメは、何かを察知し、  
すべて飛び去って行く。

わあ、美少女二人とか文字通り両手に華だな（  
糞が

神様転生なんて、結局のところ主人公補正持つてなきや、  
上手くいくわけないんだな、と他人事のように考えつつ、  
しきりに話しかけてくる二人の言葉を必死に流しつつ、  
川神学園まで向かうのだった。



川神学園に無事着いた後のこと。

——誰か、教えてくれ。

どうしてこうなった？

「……………ヤマト？」

「……………大和？」

「

「——ほう？貴様、ずいぶん爛れた生活を堪能しているようだな？ええ、おい……………」

両手をぼきぼきと鳴らしながら、

目に怒りを秘めた視線を俺たちに向けてくる、

長髪ロング。スタイルはボンキュッボンのナイスバディ。

美女オブ美女の女性。川神百代。

学園最強の彼女が、拳を構えて俺の目の前に立ちはだかった。

腕に自信はあるほうだけど、ちよつとだめかもしれんね、これわ（他

人事)

この状況から入れる保険、誰か教えてクレメンス……。

つづぬ

あいつら絶対ドラゴンボールの世界の住人だって。  
絶対（震え声）　く俺は悪くねえ!!　く

デンジャー!!デンジャー!!と頭の中で警報がけたたましく鳴り響く。

薄れかけていた意識を腹に力を入れて取り戻し、前を向いた瞬間、残像が見えるかと思うほどの速さで百代さんが俺に向かって、右ストレートを振りかぶってきていたのが目に映った。

「っ!!」

「きゃっ!?!」

「あっ!?!」

俺の両横にいた一子と、京を両手で突き飛ばし、とっさにかがんでよける。

かすった左肩の服がナイフで切られたかのような切断面になっていた。

続く連撃を繰り返さんと、左のフォローパンチを打とうとする、百代さんの左フックのような軌道にとっさに右手を90度に立て合わせて、

百代さんの左手首に抑えて動きを止めるも、殺しきれなかった衝撃が、

びりびりと体に伝わる。

理屈でいえば、完全にこの態勢で抑えきれたはずだ。

——だというのに、目の前のサイヤ人はその止められた状態のまま、

力任せに腕を振りぬいて俺を弾き飛ばそうとしてきている。

「らあっ!!」

「!!」

一瞬、体が浮かされたのと同時に、右足で百代さんの腹めがけて、蹴りを放つも、右手でガードされた。

ちっ、と舌打ちを打ち、左足から着地し、すぐに百代さんと相対す

るように、

ファイティングポーズをとる。

追撃をかわすために、百代さんと視線を合わせ、前に出させないようにけん制する。

それが効果があつたからかは分からないが、それ以上追いかけてくることもなく、

少し離れた位置から先ほど俺の蹴りをガードした、右手を見つめ、にやりと笑みを浮かべた。

——うわあ、悪い顔してやがる……。

「……ふふふふ……。——はーはっはっはっは!!」

先ほどまでの怒りの表情がころりと変わり、笑顔を浮かべて大笑いし始める。

それまで怒っていた人物が突然笑いだして、背筋が凍るような不気味な感覚を得る。

ハッキリ言つて、クソ怖い。

「いいなあ!!やはりお前は面白いやつだ!!ヤマトオ!!」  
「……。」

戦うと元気が出るなあ!!と言わんばかりである。

どこの御大将だ。なんでバーサーカーばかりなの？

ここは修羅の国だった……？（自問自答）

とりあえず、相手がやる気満々でいつまた襲い掛かってくるかわからないので、

しゃべりかけてやる気をそぐことにした。

「百代さん。やめてくれませんか？遊んでほしいなら、

おじいさんに相手してもらつてくださいよ。」

「百代さん？」

うわ。笑顔からまたころつと眉を八の字にして、百代さんが怒り始めた。

原因は……なんだ？

「あの……百代さん？」

「百代さん？んん？」

「め、めんどくせえええ!!?」

怒っている理由がわからないのに言ってくれないから、めちやくちやめんどくせええ!!!

えーと。一子と京が両隣に今はいるわけでもないし、ちゃんと毎日メールでやり取りはしている。

後は、百代さんと呼んでから……。

……。

ちよつと思いついたので試してみる。

「あの。」

「ふん。なんだ? ヤマ……。」

「モモちゃん。」

「~~~~~!!!?」

——次の瞬間、俺の視界は暗転し、

薄れゆく意識の中、最後に見たのは、

顔をほんのり赤らめ、しかし耳は真っ赤に染まった状態で、

こちらに向かって右こぶしを突き出した姿の百代先輩の姿だった。

「や、大和!」

「やまと!!!」

「……………あつ。し、しまった……。」

呼んだら、呼んだで恥ずかしがって殺されかかるとか、

どうしろ……と……。

◆

「」

「ご愁傷様。」

「今日も良く生きていたな、オマエ。」

「プロテイン取れ。そうすればもつとタフになれるぞ?」

プロテインは万能薬じゃねーんだぞ、といつもならガクトに突っ込んでやるところだが、胸のあたりに喰らった百代先輩のパンチの跡がいまだに体を痛めていてそれどこれではない。

一応、保健室で一通りの治療は受けさせてもらったが、我ながら骨どころか、後遺症のこる傷さええないのは勲章ものだろう。

でも、いい加減あのわがままメンタル小学生のバーサーカーとやりあうのは、

きつすぎる。

というか、ほかの武道四天王に喧嘩売りにいけよお!!、と心の中で叫ぶ。

具体的には我が学園が誇る剣聖、まゆつちとか、まゆつちとか、まゆつちとか、まゆつちとか、まゆつちとか。

まゆつちとは、武道四天王の一人であり、この学園で最強の剣術使いのことである。

ちなみに、クツソ美少女の上、性格もほかの女子生徒たちよりもはるかに優しいというある意味、パーフェクツな娘。

ぶつちやけ、結婚するならああいいう男を立ててくれそうな子がいい。

気の強い女は、面倒であることは前世の経験から嫌というほど身に染みっていた。

「やまと、大丈夫?」

「大和、平気?」

「大丈夫だ。・・・ところで。」

「何?」「なに?」

「二人とも、近くね・・・?」

教室の中だというのに、満員電車のような密度で、なぜか俺たち三人は寄り添っている。

ぶつちやけ、こうする必要は全くない。

マジで。だってほかにも席はあるし、

俺のけがの手当てはされているから、  
二人がばんそうこうとか、包帯を俺の体に巻かなくてもいいのであ  
る。

ケガとは特にしていない手の甲にぐるぐる巻かれると、  
まるでボクサーのようだな、と他人事のように感じた。

「近いって、京。離れたほうがいいんじゃない?」

「それはあんたのことですよ、一子。」

二人ともなんだよなあ、と言えたらどんなに楽なことか。

八重歯をむき出しにしてうなる一子と、

笑顔を向けながら、目は笑っていない京の二人に、サンドイッチさ  
れる。

誰か、誰かへるぷみー( )

「——直江大和はいるかつ!」

「うっさ!」

ガラガラ、と教室のドアが開けられ、

大声が教室中に響く。

近くにいた生徒がその声の大きさに、

思わず言った。まあ、確かにうるさいと思う。

さて、誰がき・・・。

「——む? なんじゃ? せつかくこのわらわが来てやったというの  
に。」

その阿呆面は。喜ぶがいいぞ。」

「.....」

「.....」

「.....」

「」

——Sクラスの空気読めない子ナンバーワン、不死川心の襲来  
だった。



(空気の読めなさは) お前が、ナンバーワンだ・・・。

つづぬ

決闘に向けてくどれだけ鍛えても、怪物どもには勝てる気がしない（本音）く

「シッ!!」

サンドバックに向かって、ジャブ、ストレート、フック、アッパーのコンビネーションを放つ。

自分と同じ身長の人間を想定に、顎に向けてブローを連打していく。

パンチを食らってサンドバックが振り子のように揺れた。

「ぜあっ!!」

続いて、右足で金的狙いの前蹴りを放ち、サンドバックを両手でつかんで、

膝蹴りをかまし、左ひじのフォローを入れる。

先日よりも、コンビネーションを放つのにかかる時間がほんのコンマ数秒だが、

短くなっただけがする。

続いて、さらに人体急所である喉に向かって左手で手刀を繰り出そうとしたとき、

コンコン、と部屋のドアがノックされた。

揺れていたサンドバックを両手で抑えて、

近くにあったタオルで体を軽く拭き、

ドアの前まで歩いていく。

「はい?」

『大和。俺だ。今、大丈夫か?』

その声は俺がよく知る相手、風間翔一こと、キャップの声だった。右手でドアノブをひねって開けると、

その後ろにはキャップが立っていた。

左手を上になく上げて、よう、と挨拶してくる。

「いやー。相変わらず励んでんなー。あ、

中に入ってもいいか?」

「ああ。いいぞ。」

とりあえず、自分の喉が渴いているのもあったが、小さな冷蔵庫の中からジュースを取り出し、キャップに投げ渡す。

かこん、とプルタブを引つ張る音が聴こえると、美味しそうにキャップがぐびぐびと飲み干す。

「ぶはー。あー。いっつもクツキーからもらっていたけどよ、たまにはこういうのも悪くねーな。」

「ああ。」

クツキーとは、俺たちが在籍している学生寮に存在する、お手伝いさんのロボットである。

体の中にジュースなどを入れ、冷やすことも可能なので、いつもあいつに頼む、ところなのだが、

いちいち自分の部屋に呼ぶのもあれなので、

結局のところ自分専用の冷蔵庫を買って対応したのだった。さて、要件を聴くことにしよう。

「――Sクラスとの”決闘”。日時が決まったぜ。」

その報告を受けて、俺は右手に持っていた缶ジュースを思わず握りつぶした。



同時刻、2―Sのクラスにて。

「――以上が、決闘の概要となります。」

「……………」

自身の従者、あずみから2―Sクラスと、2―Fクラスの決闘について、

報告を受けていた九鬼財閥の跡取り、九鬼英雄は何かを考えるように、

目をつむりながら腕組をしていた。

「ふむ。総力戦。わかりやすくていいですねえ。」

「そうだな、若。」

「……………」

その近くで2―Sの三人組。

眼鏡をかけた、知性を漂わせる人物、葵冬馬。

冬馬のことを若と呼んだスキンヘッドの人物、井上準。

そして、マシユマロを食べながら、ぼーつと携帯を見ている、

白髪、赤目の少女、榊原小雪。

同じく、この決闘に参加する主要メンバーである。

両腕を組み、右人指し指で自分の左腕をとんとん、と叩いていた九

鬼英雄は、

目を開けて自身の従者に尋ねる。

「――」 奴” はいるのか？」

その言葉に、あるものは首を傾げ、

そしてあるものは誰かをはつきりと認識していた。

「はい。今まで裏方でいたようですが、此度の戦では、

出てくるとの情報も。」

「――」 ふふふふ。―― はーつはつはつはつはつは!!」

忍足あずみの言葉を聴いて、九鬼英雄は大きく口を開け、

愉快そうに笑い始める。

「この戦に勝ち!!この九鬼英雄の威光を知らしめてやろうではないか  
!!

ふははははは!!」

「.....」。

大丈夫かな、と思いつつも、まあ、いつものことですか?と、

忍足あずみは大笑いしている自身の主を見つめるのだった。

「.....」 勝ったら、何をしてもらおうかな...?」

「?どうしたんですか?小雪?」

「ううん.....ナンデモナイヨ.....」

若干瞳孔の開いた眼で、携帯の画像に写っている人物に、

小声で彼女がつぶやいた言葉は、誰にも聞こえることはなかった。



「なんか、こう、ものすごい寒気がしたんだが……。」

「気のせいだろ。バーベル使うか？」

「使わねーよ。」

ぺしっ、とガクトに突っ込みを入れる。

今は、俺が住んでいる学生寮の居間に集まり、

これから数週間後に行われる2―Sクラスとの決闘について、

作戦を練っていた。

参加者は、2―Fクラスの風間ファミリーの、キャップ、ガクト、モ

ロ、

一子、京。

そして、金髪のロングヘアーが特徴的な、

同じく2―Fのクラスメイト、クリステイアーネ・フリードリヒ。

1―Cの”剣聖”ことまゆっち。

「……………」

ソファーに座りながら、大きな胸が強調されるようなポージングで、

両腕を組み、俺に向かってじーっつと視線を投げ続けてくる。

そう、川神百代こと、モモちゃんである(そう呼ぶとまた右ストレー  
トで吹っ飛ばされるので、やっぱりモモ先輩と呼ぶことにした。)

このメンツが、2―Fの中で特に強いメンバーである。

まあ、二人ほど違うクラスだがそこは細かい部分である。

なんか、構えオーラ出しているモモ先輩は置いておくとして、

決闘の場になる、川場の地図をホワイトボードにマグネットで貼り  
付けて、

作戦の内容を詰めていく。

「今回の決闘のルールは簡単だ。敵の”大将”を先に討ち取ったほう  
の勝ちだ。」

「……何か、質問のあるやつはいるか？」

俺の言葉に、何人かが手をあげて、質問したそうに眼を輝かせている。

とりあえず、膝上に乗っている一子をまず指すことにした。

「はいはい!!敵の”大将”さえ倒しちやえば、どんなに負けそうな状態だったとしても勝ちなの?」

「そうだ。ぶっちゃけ、相手側が100人残っていて、こちらが2人しかいない状況だったとしても、敵の総大将を倒しちまえば勝ちだ。」

続いて、右手をあげている京を指す。

「弓で狙撃できるようなポイントってある?」

「ああ。そういうと思って、狙撃ポイントをいくつか探しておいた。

この複数の場所を移動しながら、狙撃をしていってくれ。」

川から少し離れた場所。そして、敵の本陣があるであろう場所の近くに、

いくつか黒のマーカーで丸をつけて、説明していく。

次に、金髪お嬢様こと、クリステイアーネ・フリードリヒを指す。

「主力の配置が独特のようだが……?」

「狙いがあるのさ。ま、クリスは切り札の一人だからな。

頼りにしてるぞ。」

「う、うむ……。」

褒められなれていないからか、

顔を若干赤くして、眉を吊り上げながら真顔を保とうとするクリ

ス。

前世で会った女子どもとは違い、純粹で、惹かれるものがある。

いいねえ、と視線を彼女に送っていると、

一子や、京からじとーつとした視線を送られ、

慌てて取り繕ろう。

「ま、まあ、説明した通りだ。”決闘”当日までの準備もしていくぞ。

——皆!!勝つぜ!!」

おー、と俺のかけ声に合わせて、全員が拳を突き上げた。

「あ、そういえば……。」

ガクトが何かを思い出したかのように、俺に尋ねてきた。

一体なんだろうか。

まあ、ガクトだし、たいしたことでは

「——なんで2—Sクラスの不死川という奴と、

榊原とかいう奴が、お前に会いに2—Fに来たんだ？」

「「「は？」」」」

「……………」

「」

——最後の最後、締めるところでガクトがとんでもない爆弾を落とすやがったのと同時に、俺は窓から外に向かって飛び出し、全力疾走するのだった。